

伊東市史だより

第6号

平成17年3月31日



懐かしい伊東の風景

―伊東温泉旅館協同組合所蔵絵葉書から―
大正から昭和にかけて、伊東は温泉地としてひろく愛される街になってゆく。その魅力の第一は温泉、第二はゆつたりとした風景にあったろう。当時作られた絵葉書には伊東の懐かしい風景がたくさん盛り込まれている。



ITO HOT-SPRING IS NOTED FOR ITS EFFECTIVE HOT-SPRINGS AND NATURAL BEAUTIES AROUND IT.

物見の松 (写真上)

現在の市役所付近から撮影された物見の松である。一面の茶畑の向こうに大木「物見の松」がある。

江戸後期の記録に、安房まで見渡すことのできるこの松から伊東祐親が物見をさせたとの伝承が記されている。このためか、絵葉書には「伊東城蹟」とされているが、実際には古墳の墳丘であつたものとみられる。

古くから伊東八景とか十二景な

どとされ、代表的な伊東の景観として仰がれていたが、昭和五十七年に枯死して倒され、現在は若木が植えられている。

浄ノ池 (写真下)

失われた風景のひとつに「浄ノ池」がある。元、浄円寺の庭池であつたものが、元禄津波で寺が流されたものとの伝承もある。

大正十一年に特有魚類生息地として国の天然記念物に指定された名所で、訪れた人々はこの池に閉じ込められた南海産の魚類を見て水中の不思議に想いを巡らせたのである。

池から温泉が湧き、年間を通して二十八度の水温であつた。毒魚と呼ばれたオキフエダイ、じんなら（ヤカタイサキ）、よこしま（シマイサキ）、ユゴイ、オオウナギなどが生息した。大正年間到这里を訪れた室生屋星が「じんなら魚」と題する詩を残している。

温泉湧出の変動などの理由で特有の魚類が見られなくなり、昭和五十七年に指定解除、現在、そこにはビルが建っている。

対談 伊東市史編さん

〔佐藤〕平成十一年度から開始した市史編さん事業ですが、昨年二月、残念ながら編集委員長の網野善彦先生が亡くなりました。

今回、新たに編集委員長をお願いした坂詰秀一先生と地元の加藤清志先生をお招きして伊東市史の計画や抱負を伺いたいと思います。



編さん委員
佐藤 悠
(伊東市教育長)

改めて、伊東市史編さん事業をご指導いただきますよう、よろしくお願いいたします。



編集委員長
坂詰 秀一
(元立正大学学長)

〔坂詰〕網野先生の跡を継ぐということで、重責と感じています。前回の『伊東市史』は市制十

○新しい市史の構想



編集委員
加藤 清志
(市文化財審議委員長)

周年記念事業で、今回は市制六十年です。五十年ぶりの市史編さん事業ということ。いろいろな意味で大きな仕事だと思います。

〔加藤〕前回の『伊東市史』は昭和三十三年に二巻構成のものが出来て、当時の評価は高かったのですが、いま振り返ると反省点もたいへん多い内容です。伊東郷土研究会などで、さまざまに検討されてきましたけれど、例えば、資料編がわずかに一巻しかなくて、記述の原典が何によっているのか調べたことも分からないことが多いのです。改めるべき点が多いですね。

〔坂詰〕今回の市史は、全十一巻構成で「通史編」二冊、「資料編」六冊、「民俗編」、「自然環境災害編」、「ビジュアル版伊東市史」各

一冊の計十一巻を刊行する計画です。ですから、昔と違って史料として未来に伝えるという部分も十分カバーできるはず。です。

○市民参加の市史

〔佐藤〕前回の反省を踏まえて構成が考えられたということですね。坂詰先生のご意見として、こうありたいという点はいかがですか？

〔坂詰〕計画の当初段階から網野先生とはよくお話しをさせていただきましたが、編集委員全員の考えとして「市民参加の市史を」という姿勢でいます。伊東市の歴史ですから、当然、市民が主体になるべきです。しかし、これまでのふつうの自治体史では、あまりその部分への配慮はなくて、学者がさつと来て綺麗な歴史を書いておしまいということが多かったと思います。

そこを改めて、郷土史の研究成果も大事に取り上げていく、できるだけ多くの市民に資料の提供を求めていく、という姿勢で参りたいと考えています。

〔加藤〕おっしゃるとおりだと思

で重要な文書はたくさんあります。

〔佐藤〕古文書解説の市民グループのみなさんには、頭の下がる思いですが、教育に携わる者としては、市史編さんの先生方の力をもっともっと生かしたいと思っています。そういう意味での裾野の広がりはいかがですか？

〔坂詰〕先程の市史講演会は、市史編さんの先生方の調査成果が話されています。講演に参加していただければ、その面白さや重要性はわかっていただけますが、参加できなかった市民の期待にこたえて、翌年発行の『伊東の今・昔・伊東市史研究』で活字化されます。

さらに、この本には講演以外の先生方の調査成果を、読者である市民を意識しながら書いてもらっていますので、どんどん読んでいただいて、伊東の歴史を学校などで子どもたちに教えてほしいですね。

市史講演会とは別に、「市史講座」もあります。そこでは、例えば市史をお願いしている津波研究の第一人者、東北大学の今村文彦先生から研究の最前線を教えてい

いますが、実際にはこれがなかなか難しいです。

〔佐藤〕具体的に、どういう市民参加が考えられましょうか？

〔加藤〕これまで具体的には、郷土史研究の成果や市民の実体験を『市史叢書』としてまとめました。他の市町村の叢書では『資料編』を補う内容になるのが普通ですが、伊東市の場合は、ここに市民の経験してきたものを取り上げました。



市史叢書と市史研究

市史叢書一集では市民による「郷土史研究集成」、二集では「狩野川台風の体験」をたくさんの方々に書いていただいた。三集では

ただきました。伊東では津波被害が歴史的に幾度もあります。そこで、最も効果的な避難の方法は丈夫な鉄筋のビルに避難すること。だそうです。こうした防災のための研究成果は、すぐに役立ちますので、いち早く市民に還元したい成果だと思っています。

○今後の課題

〔佐藤〕伊東市の教育の目標として私が提唱していますのは、「伊東大好き人間の育成」ということを掲げています。伊東が大好きと思える子どもを育てるために、先ず伊東のことを良く知って、地域の魅力に気づくことが必要だと思っています。そういう意味でもぜひ、先生方には伊東のことをもっと調べていただいて、魅力を語っていただきたいと思います。

これからの課題はいかがですか？

〔坂詰〕私は、考古部会を担当させていただいています。平成十三年の川奈の姥子洞窟では、房総や三浦半島とつながるような古墳時代中期の祭祀に使ったアワビが五十点も出土しました。この洞窟内

市民生活と関係の深い「温泉の歴史」を取り上げ、四集は「伊東の文化財」、現在、五集として「学校の歴史」に市民に身近な人にくさん登場していただくようにつとめています。

〔坂詰〕市民参加という伊東市史の特色を充分に考慮する一つの方法は、毎年行われている「市史講演会」ですね。これは、他の市町村に比べて市民の参加者もたくさんありますし、市史編さんの調査成果がいち早く市民に還元される機会になっています。

〔佐藤〕市史講演会は恒例になりました。先日、神野善治先生の講演「海と職人の歴史」で第六回を数えました。鈴木市長も毎回欠かさずに拝聴しています。

古文書解説にも市民参加をしてもらっていると聞きます。

〔加藤〕郷土研究会や図書館の活動から古文書の解説をするグループが育ってくれまして、多くの古文書を読んで、パソコンに入れていただきました。

ご承知のように古文書というのはなかなか難しく、誰でもすぐ



新しい伊東市史の想定写真

〔佐藤〕伊東市にどのくらい古文書が残っているのでしょうか？

〔加藤〕江戸時代のものだけに限ると、およそ六千七百点です。もちろん、それ以外にも、明治・大正・昭和と伊東の歴史をみるう

の遺跡は学界でも有名になりました。さらに、鎌田城跡の発掘調査では、伊東氏を考えるうえで欠かせない遺跡と判明しました。

今後は、江戸城の石垣などに供給された石切場の遺跡の扱いが欠かせません。江戸ばかりでなく、全国的に石切場への関心が高まっていますので、この点の基礎調査を大いに進めたいですね。石切場遺跡は伊東で最も注目すべき重要な遺跡です。

市民のみなさんからは、あそここういう石があるとか、こういう伝説があるというような、普段の何気ないことでも、いろいろな教えてほしいですね。

〔加藤〕地域史料部会を担当させていただいて、資料整理や石造文化財などの調査をしていますけど、坂詰先生のおっしゃるとおり、何気ない普段の話の中に伊東の歴史を書く上での重要なヒントがあります。

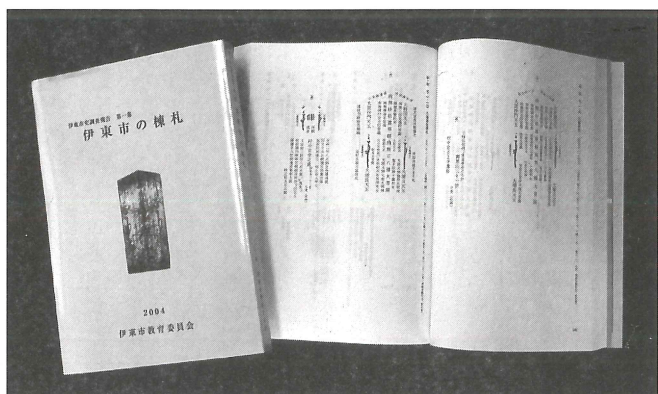
先日も事務局に市民から持ち込まれたものに「破れた襖」がありまして、その下貼りに明治初期の文書が貼られていました。物資の

ない時代には、紙は襖の下張りなどに再利用されますので、そんなところにまで貴重な歴史が隠れているのです。何も考えずにゴミにしてしまえばそれで終わりですけど、「ちよつと待て。市史編さん室に聞いてみよう」と思ってもらえれば、貴重な市民の体験を捨ててしまうという事態が避けられます。

これからの課題としては、比較的新しい時代の市民の日常生活や企業活動を調査する必要がありますので、会社・農協・漁協、あるいは、それぞれのお宅に伺わせていただくことがあります。ぜひ、協力していただきたい。

〔佐藤〕地域史料部会の棟札の報告書が出ましたね。

〔加藤〕そうです。それこそたくさん市民、神社やお寺の管理者のみなさんにお世話になりました。『伊東市史調査報告第一集 伊東の棟札』がまとまりました。建築史が専門の建部恭宣先生にまとめていただきました。四九〇ページにもなる厚い報告でして、伊東の棟札を集めました。



市史調査報告第1集『伊東の棟札』

〔坂詰〕市史編さん事業で、これほどたくさん棟札を集めてきたのは、全国的にみてもあまり例がないと思います。伊東の神社仏閣が伝統を良く伝えてきた証拠ですね。

〔加藤〕棟札というのは普段みる機会がないので、若い方にはピンとこないかもしれませんが、しかし、今でも建築物の屋根裏には大工さんたちが作った木の札があります。市内のお堂や小さな社まで、町内会などに立ち会っていただきましたが

ら殆ど全部を開けていただいたものです。

棟札には、その時代の村役の名が書かれるだけでなく大工・石工・木挽など建築関係の職人の名が記されますので、重要な情報が残されています。特に神社では多数の棟札が残されますので、古文書が火災などでない場合は、これが唯一の史料ということもあります。難しい文字ばかりで、読み物としては不向きですが、将来に棟札資料を伝えるという点で重要な報告です。

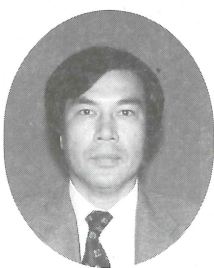
〔佐藤〕古文書も棟札のことにしても専門知識が必要ですから、市民の力だけでは良いものはいけません。引き続き先生方の大所高所からの指導をお願いしたいですね。最後に市民へのメッセージをお願いします。

〔加藤〕冒頭に述べたとおり市史編さんは、鈴木市長の英断で五十年ぶりに行われています。逆に言えば、専門家の知恵を借りる五十年に一度のチャンスだと思っています。この機会を逃さずにそれぞれの家のご先祖の活躍を確認してほしい

ですね。

〔坂詰〕常々「歴史は過去を知り未来を考える玉手箱」だと考えています。将来の伊東市がこうあるべきだということを考える上では、是非無くてはならないのが歴史です。玉手箱の中の玉がひとつでも多くなりますように市民のみなさんに教えていただきたいと、玉を磨くように務めていきたいと考えています。

伊東市史編さんのこれまで

副編集委員長
田上 繁
(神奈川大学教授)

平成十一年に発足した伊東市史編さん事業も、各部会の真摯な取り組みによってその成果が次第にあらわれてきました。私が市史編さんに参画させていただくようになったのは、前編集委員長の網野善彦先生のご縁でした。それまで、神奈川大学日本常民文化研究所の所員として、奥能登時国家調

査をはじめ全国各地の研究調査に同行する機会を与えられ、日本人を農業主体の民族として一元的に論ずる従来の歴史観に対して、海民や職人、遍歴する芸能民などといった非農業民の存在を重視した網野先生の斬新な研究から多くのものを学んできました。

そのような時期、財団法人時代の日本常民文化研究所の関係者宅に伊東市宇佐美、熱海市網代などに関する古文書が保管されており、神奈川大学常民研では、その文書の確認、整理作業と返却作業を進める必要性が生じてきました。

加藤清志氏（地域史料部会長）をはじめとする伊東市関係者からのご助言を受けながら、その確認作業は常民研の関口博巨氏（近世部会専門委員）によって進められ、整理、保管の条件が整ったならば、研究所はただちに伊東市に返却、写真撮影の終わった段階でフィルム、の複製を研究所にいただく、という約束ができました。この過程で、網野先生の言によれば「ご迷惑をかけた先輩の罪ほろぼしのつもり」で市史編さんに協力するこ

とになったのでした。

整理済みの古文書のうち、熱海市と東伊豆町の分はすでに返却されています。伊東市についても、目録取り作業、マイクロフィルムによる写真撮影が完了し、返却の準備は整いつつあります。貴重な近世・近代文書が多数ふくまれており、当然ながら、今回の『伊東市史』にも活用されることになりました。私が所属する近世部会では、すぐれた『伊東市史』の編集、刊行を目指す一方で、市域に残る古文書の悉皆調査を行い、それを歴史資料として、また文化遺産として後世に伝えることも重要な任務と位置づけています。その土地で生まれた歴史資料は、その土地で伝えられていくべきである」というのは、網野先生がよく説かれていたところです。その意味では、歴史研究の進展にともない数十年後に編さんし直される次の刊行時にこそ、記述の内容はもとより、古文書など歴史資料をきちんと整理、保存しているかなど、今回の市史編さんの真価が問われるのかも知れません。

また、近世部会では、中央の研究者による「自治体史請負」化とならないように、地元に着した市史の編集を心がけています。たとえば、市史編さん計画では資料集として近世編を二冊刊行しますが、その作業では編集委員の私と編集専門委員の泉雅博氏・関口氏が全近世文書の中から、伊東市に特徴的な内容をもつ古文書を選定し、その一次選定した古文書の筆写作業を地元の古文書サークル（二組）の方々にお願いするという方式を採用しています。何よりもその筆写の速さと正確さには驚かされます。

さらに、市民の皆様が古文書に親しまれ、市史編さん事業に一層ご理解をもつていただくため、昨平成十六年六月から八月にかけて、八回にわたる「古文書で読む伊東の歴史」（第四回伊東市史講座）を開催しました。この講座に対する関心は高く、五十名近い多数の参加者がありました。これらは、市民参加型の市史編さんを目指す上では意義のあることと思われ

ところで、伊東市史編さん事業に並々ならぬ情熱を傾けておられました網野先生が、闘病生活もかなわず、昨年二月二十七日に他界されました。このたび、はからずも副編集委員長という重責を担うことになりましたが、網野先生の理念を受け継ぎ、関係者とともに「市民に身近な市史づくり」を目標に編集作業にあたってみようという考えでいます。今後ともご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



田上先生の指導により
古文書の裏打ち作業を実習する講座参加者

各部会の動き

考古部会の活動

これまでに発掘された遺跡の出土資料の取りまとめを進めるのと同時に、宇佐美城・台場跡・石切場などの史跡調査を進めます。

古代・中世部会の活動

いよいよ本編の古代・中世史料編の刊行に向けて作業の大詰め段階です。伊東氏・宇佐美氏など全国的に活躍した武士たちの残した史料を集成します。

近世部会の活動

古文書の翻字作業を古文書サークルのみなさんに協力いただきながら進めています。市内の江戸時代文書がおよそ六千七百点です。未発見もあるものと思います。江戸時代の文書解説に挑戦する方を募集します。

近代・現代部会の活動

漁協・農協・東海バス・伊東ガスなど明治・大正・昭和期の伊東の産業のようすをまとめるために会社にかがう予定です。ご協力をお願いします。

自然環境・災害部会の活動

本郷公園と大川橋駐車場の二箇所では北海道大学平川一臣先生の研究グループによるボーリング調査が実施されました。

ボーリングによって得られた地層をみることで、記録が残っていない時代も含めて、過去にどれほどの津波が伊東市を襲っているのかを判明します。津波襲来の周期を確認することによって、次の津波や大地震の予測に役立て、防災のための基礎資料になります。



ボーリング調査の実施状況

民俗部会の活動

市史研究第5号に「大室山をめぐる民俗」と題して、地区などの民俗調査の成果をまとめました。大室山の山焼きや茅の利用方法など

ど興味深い記事になっています。
地域史料部会の活動
墓石や石仏などの石で造られた文化財を調査しています。石仏にはいろいろな先祖からのメッセー

ジが盛り込まれています。大切にひとつひとつ拾っていきます。

市史編さん事務局から

お知らせ

紹介した図書は市役所5階の市教育委員会窓口または伊東図書館納入組合加盟の書店にて実費配布しています。叢書1、2は品切中です。

お願い

平成十七年度も市史講演会、市史講座を計画しています。詳細は市広報等でお知らせしますので、積極的な参加をお願いします。

各家庭にある古い書類、写真、地域の伝説などをさがしています。ご存知のことをお知らせください。気軽に文化財管理センター二階の市史編さん室をおたずねください。

編集発行 伊東市教育委員会生涯学習課
市史編さん係
〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号
☎〇五五七-三六〇 内線二八四五